

## ブルードン

### その現実主義

奥 沢 邦 成

キャンプの前夜、長谷川先生を囲んで話し合う機会を得た。「ブルードン」をテーマにして、という少し堅苦しくなるが、先生とキャンプの準備にあたった中村君、それとレポーターの肩書きをつけた奥沢の三人が、ビール片手に論じ合ったということである。

ぼくの主観では、しかしかなりいいところまで内容的に掘り下げられた、という記憶が鮮明に残っているのだが不幸にして、それだけが残っているといった方が正確で、肝心の内容、その掘り下げられた問題は頭に残っていないのである。

従って、報告というよりも、全く自己流に書いていくしかない。御了解を。

#### はじめに

ブルードンは、おそらくたれもが感ずるであろうように、全体的にはきわめてつかみにくい思想家の一人である。しかし、

そうした外見の底には深い統一、少なくとも一貫したものがあ  
るように思われる。その考え方の特質をなすものは、一言でい  
えば、人間および社会についての多元的な見方である。人間に  
ついては、その特性、能力の多様性と個人の内的対立、相剋  
を認め、むしろ尊重し、多様性と対立をとらしてこそ人間たる  
ゆえんの自由が生かされるものと考え、そのための社会的条件  
を探究したといえるであろう。

そしてその前提にあるものが、社会についての一定の多元的  
な見方、すなわち社会的アンティミーとその均衡の理論であ  
る。ブルードンによると、物質的世界も精神的世界もすべて、  
相互に還元されない諸要素の多元性から成り立っている。

矛盾するものの対立、闘争こそは運動、生命、進歩であっ  
て、その融合は死である。問題は、アンティノミーの均衡、  
たえず不安定な、社会の発展と共に変る均衡を見出すことと  
ある（『所有の理論』）

（長谷川進「ブルードンの矛盾を読む」から）

ブルードンは確かに自由を理解し、自由が生かされるための社  
会的条件を鋭く追求した思想家である。それは一九世紀の社会主  
義思想において独特の位置を占めていたといえよう。そして、一  
九世紀の社会主義思想一般が、あるいは破綻し、あるいは全く異  
質な現実をしか生み出せなかったことによって、その説得力を失  
ってしまった今日、われわれはブルードンの思想のうちに極めて  
現代的な意義を見出すのである。

そこにはユートピアや虚構の入りこむ余地のない現実主義があ

る。ぼくはその現実主義に引かれる。ここでは問題提起の意味をもたせて、いくつかの特有の概念を取りあげていこうと思う。

### 集合力

社会と個人——このように対置され、設定された問題は、いはば水と油をいかにして混ぜ合わせるかに似て、非常な困難を伴うものである。両者をお互いに相容れないもの、あるいは対立するものとみながらも、その統一を図ろうと意図し、論ずるのが普通である。実際には、そのいずれかに力点を置かざるを得ず、社会に力点をあげば個人は一齒車と化し、個人に立つと社会は架空の存在となる。この両極論は別としても、それら大同小異の答えは發展性を持ち得ていない。

それにもかかわらず、社会と個人という形の設問に込められた意義は、われわれにとって大きな、同時に本質的な意味を含んでいることにかわりはない。

ブルードンは、人間が労働において、それが共同作業として行なわれる場合に、個々の個人的労働の総和以上のものとなることに着目した。数学的な一＋一＝二以上に、 $\alpha$ が加わるのであり、それは社会が実在するための実質的な基盤を形成している。集合力とは、そのような人間の結合あるいは（社会的）関係の中で形成される、個々人では果しえない作用ないしは成果である。すなわち、個人と個人が関係を結ぶことにおいてはじめて可能とされるときもいえる。この集合力の理論は、

「経済的、政治的、文化的、その他諸々の社会的な活動力を意味し、現実にはさまざまな集団、階級、全体社会の力として働い

ている。この集合力というのは、社会ないし「集合的存在」をもって個人のたんなる寄せ集めではなく、それ以上の、個々の性質法則、力を有する独自の生きた存在と見ることに根ざしている」さらに次のように、この集合力は特徴づけられるのである。

「集合力を構成する個々人の自発的活動の面を基本とし、それを本質的に個人を強制する客体的な力とはみなさないことにある」この人間の自発的な活動の結合から生ずる集合力は、現実の社会では外在化、疎外された集合力として権力化し、また生産の場においては、資本家によってかすめ取られている。従って、そこで追究されるのは、「集合力をその本来の創出者に奪いかえし、しかもこれをあくまでも個人と集団の自発的創造性を生かす方式で実現」するからであり、ここに「ブルードンの人間解放と社会変革の考えがある」のである。

この「個人と集団の自発的創造性を生かす方式」こそ、ブルードンの追求し、またそれによって特徴づけられる思想的テーマであったのではないか。矛盾を暴露し、否定し、破壊しようとした他の社会主義が※

破壊することにおいてではなく、「方式」を追究し実現することにおいて、人間の解放と社会の変革は現実の根をおろす。そしてそこから「分離」と「対重」の概念が提出されるのである。

### 分離・対重

簡単に説明を加えると、次のようである。

「労働者階級は、ブルジョア階級によって抑圧され無視されて

いるのだから、自分たちも彼らから身を引き離し、自らの建設すなわち将来社会のいわば細胞たる要素の建設に努力すべきだ、ということになる」

それは、即時、その場で、個人と集団の自発的創造の方式を見出し、実践していくことであり、同時にそれは人間解放、社会変革の方途の第一歩にほかならない。

対重とは、既存の権力、体制への対抗重力であり、強権社会にかわる、新しい社会的均衡を生みだすための基礎となる要素力である。そこでは言うまでもなく人間の自主・自由が原理とされ、そのための実践が内実となる。

この分離と対重という基本概念の延長線上に構想される方式、実践、そして社会がどういうものであるか、それをより具体的に描き出す課題は残されている。しかしそこに示唆されたものが、現代のわれわれにとって重要な意味をもつことは疑えない。

その方式は権力の奪取とは無縁であり、政治ではなく、経済に視点を置く。政治は、集合力理論によれば虚構となり、集合力を収奪することによってかろうじて成立しているにすぎないのである。

「ブルードンにとって革命は、何よりも社会の基底すなわち生産のレベルにおいておこなわれるべきものであり、それは現在の搾取経済を他の形態の経済に変え、しかもそれが労働者自身、自ら管理し、責任を負い、生産に要する知識をそなえた真の生産主体となった労働者によってこそなされる」

ここに経済組織における自主管理、連合主義、相互主義が提起されてくるのである。こうして、自主管理を原則とする多元的分

(十六ページより続く)

あってその実験はいまだに続けられているのである。

手引きは、訓練を根拠にして作られたものである。しかしこの手引きはまた訓練者や組織者たちが既に直面しなければならなかったいくつかの傾向とか問題に対抗するために、ある種の先入観をも表わしていると思う。即ち、訓練を考える際に対抗すべき傾向とか、問題点には次のようなものがある。訓練が、

a、実践回避の口実としての理論への逃避となる。  
b、密教的な知識を作りあげたり、エリートを集りを構成したりする。

c、他の主要な問題からそれるために訓練する。

次の手引きは、プレストン・パトリックの地で行なわれた討論の中から生まれたもので、それらは公認された方策というわけではないが、重要事項に関しては広範な合意を得ている。

1. 非暴力直接行動の訓練は人々を実際の状況に対応できるように備えねばならない。
2. 訓練は緊迫した状況の中でなされた時、効果をあげる。
3. 訓練は実用向きな技術を速やかに習得しうるように組まねばならない。
4. 訓練は参加者自身が反応し、評価するように組まねばならない。
5. 訓練は実際に運動を組織することに従属するものである。
6. 訓練の一つの目標は参加者が、更に自分が他の人を訓練するような能力を増進することである。

(終)

散的社会構成を、政治権力や国家を支えているところの資本制社会構成から「分離」しつつ実在のものとし、その「対重」としての比重を獲得していくことが意図される。さらにブルードンは、「自治組織たるコミューンとその連合の中に究極的には政治的国家的消滅を考えていたと思われる」のである。

#### 所有の問題

——奴隷制とは何か、という問いに答えなくてはならないとしたら、私は、ただ一言で、それは殺人だと答えよう。これで私の考えはすぐに理解されるだろう。私は、人間から思考、意志、人格を奪い去る権力は死命を制する力であり、人間を奴隷にするのは人間を殺すことであることを証明するのに、長談議を必要としないだろう。ではこの別の問い、所有とは何かに対しても同様に、それは盗奪だ、とどうして答えてはならないであろうか？ これは、第二の命題が、第一の命題の形を変えたものでしかないにもかかわらず、理解されまい、と確信してのことではない。

(ブルードン『所有とは何か』より)

右の一節がブルードンの名を一躍有名にした。だがこの命題はやがて「所有、それは自由である」となる。この一見相対立する命題は、必ずしも矛盾ではない。前者は既存の所有形態に対する解釈と批判であり、後は人間解放と社会変革のための所有への考察であると考えられる。

後者、すなわち「所有、それは自由である」の命題を補足するならば、

「いまや所有は、その機能、目的、社会的効用によっては認められてくる。とりわけ所有の政治的効用が重複される。かくして所有と国家との関係が問題の焦点になってくる。つまり、国家に對抗し、その対重すなわち対抗重力として均衡をはかり、それによって個人の自由を確保するという所有の機能が重複されてくることになる」と指摘される。

所有の概念は改めて検討されなければならない。私有に対する共有という、きわめて安直な対立概念の追求をもってしては、おそらく解決されはしない問題を含んでいると思う。この点については、むしろ私的所有の発展概念のなかに所有に関する解決が見出せるのではないか、という漠然とした考えをもっている。

※社会主義が、人間の根源的解放に何ら帰着できなかったのに対し、ブルードンのこの現実主義の視点は、まさに現代にその有効性をもちつつづけている。